①「行為」をめぐって［これは二九〇頁の『ハートの働き』についての探求のための参考資料である――編集者］

I　「行為」の問題は、古来、とりわけ哲学者達の関心の的になってきたわけです。例えば、近代哲学史に燦然と輝くカントの行為観は有名な三批判書の一つとして名高い『実践理性批判』の中で精緻な論理構成のもとに徹底的に考察されています。また、現代の代表的哲学者のM.メルロ＝ポンティの著した『行動の構造』は、現在の心理学・精神医学・生理学などの理論的成果を検証し、現実に人間の行動をどのように理解したらよいのかという難題に答えようとした本です。それから戦後日本を象徴する進歩的知識人と称された政治学者の丸山真男氏のノートに記された「行為の法則」は、さすがだと思わせるものがありますので紹介しておきます。

現在の瞬間〜が絶対である。現在が相対と考へ、うつらふものと考へたら行為出来ない。（傍点丸山）あとから何故あんなことに夢中になつたんだらうと思ふのが人間である。恋愛などにそれが最もよく現はれる。だから行動は無に面した冒険である。それを後からふりかへる時に因果の系列にあみ込まれる。」（『自己内対話』）

Q　ただ、行為の問題は、何も哲学者や政治学者を始めとする学者の皆さんの専売特許ではないですね。われわれ一般人に共通の日常生活の問題であり、自らの生と切っても切れないものであるだけに、「生命」との連関の下で考察していくことが大切だと思います。

I　木村敏氏の次なる言葉も参考になるかと思います。「知の立場で生命を捉えることはできない。生命を捉えるには、行為において生命と関わるほかはない」と。（『生命のかたち／かたちの生命』）

Q　これは行為と生命を一心同体のごとく捉えていこうとする姿勢だと思いますが、クリシュナムルティの行為観はこれとの関係で言えばどのようなものと言えるのでしょうか？

I　クリシュナムルティの言う「行動」は、われわれの生の自発的な表現であり、記憶によって形作られた活動とは異質のものです。さらに、考える精神が機能している中にあっては、行為へと態勢を整えて、実際に行

動へ身を転じていく上で、「自己」の核となってその中心的役割を演じているのが「意志（will）」であるとD教授は指摘しています。

Q　「意志」なるものを、まさか生命が持っているというわけではないですよね。

I　そのことについて、木村氏は、前掲書の中で「生命が意志を持っているというのではない。そう言えば神秘主義になる。生命それ自身意志と見るのである」と述べています。すべての行動の意図、すべての外面的なかたちの背後にある意味は、究極的に「生きること」に収斂するわけですね。

Q　考える精神が幅をきかせている時には、あらゆる願望、動機、目標などが過去の記憶を発信源として最終的には意志としてまとめ上げられ、行動に転化されていく、そういう道筋をたどると言えますね。

I　意志に基づいた活動については、先週も少し触れましたが、これに対して、静かな精神から発する行動は、あくまで精神身体構造の統一体としてある全有機体が機能しているわけであり、そこに意志が介在する余地はない旨、D教授は述べています。

このことに関して、演出家の竹内敏晴氏の「意志」についての見方が大変参考になるかと思います。それは、竹内氏が終戦の年の春に東北の地に高村光太郎氏を訪ねた際、高村氏から庭先の松の木を指さして言われたことに重ね合わせるかのように語られている言葉です。

> あの松の木を見てごらん。地上から垂直に伸びた幹がぐっと大きくねじ曲がっている。だが、あれが松の木のまっすぐな自然の性なのだ。見たまえ、あの力強さ。なにごとも形を作ろうとはからってもダメだ。自然が育っていく力に信頼することだ。

この言葉を高村氏から頂いた時期から遠からず、当時十九歳の竹内氏自身に、不意にその時がやってきたということです。

Q　その時とは、一体どのような意味をもつ時だったのですか？

I　ええ。竹内氏は十九歳の自分にやってきた精神上の一大転機――意志への不信――を次のように振り返っています。

〈その時〉私に起こったことはなんだったろうか？　たぶん、生きるために意志を振い立たせ、生活を組織し、社会に参入していくこと――むしろ周囲の友人たちを見ていれば、出世していくこと、と言った方が率直だったろうが――それらすべてを放棄したのだろう

ここからの竹内氏の人生の歩みはこの本の帯に記された言葉に語ってもらおうと思います。「〈他者〉に向う存在の根拠を、逃れようのない〈からだ〉に求め、独自な演劇活動を通じ真の〈ことば〉へと至る、四十年のあゆみ。」（『時満ちくれば――「愛」へと至らんとする15の歩み』）

Q　竹内氏に訪れた運命の時、それは身体から意志が抜けおちていった時であったということですね。竹内氏は、意志の働きとは異質なもの、具体的にはからだそのもの、これは竹内氏の言葉を借りるならば地獄の蓋を開けるようなものとしてからだの問題に果敢に挑んでいったわけですね。

I　竹内氏のように、自らの人生を振り返った時、「意志」の問題への決着が大きな比重を占めるものであったことを明示できる人は、正直言って実際多くはいないかと思います。一人の人間の人生の歩みにおいて「意志」の問題が大きな意味を持った貴重な例としてこの竹内氏のケースは記憶に留めておきたいと思います。

ところで、「意志」が行動を引き起こす源としての位置を示していることを如実に表しているのが「法の世界」であると言っていいのではないかと思います。

Q　それは、例えば刑法の世界における人間の自由意志の問題などのことを指しているのですか？

I　ええ。自由意志の問題の大前提として、そもそも人間の行動は意志に導かれて起こされるという人間観が採用されていることは間違いのないところですね。

Q　「意志」は日常生活を送っていく上で新たな行動に出たり、人生の転機に臨む際に重要な起点となり、行

動を導いていくものであることについては、コンセンサスが得られていると言えますね。

I　そうです。その前提の上に立って、刑法において「意志」の問題は、自由意志を認めるかどうかという大問題との思想的格闘を余儀なくされると言っても過言ではないわけですね。

Q　そして刑法との関係で考えますと、自由意志の問題は、刑罰の前提としての責任論の問題として論じていくことも可能ですよね。

I　ええ。この間の事情について、法哲学者の長尾龍一氏が『遠景の法学』の中で、コンパクトにまとめておられるので、その一部を紹介しておきます。長尾氏は応報刑論の代表的な思想家としてカントを取り上げ、こうカントを紹介していきます。

> カントもその潮流の中にあるところの、正統的なキリスト教思想によれば、神は人間に自由意思を与えた。人間は本能のみによって行動する他の動物と違って善と悪との間を選ぶ自由をもっている。また神は人間に善悪を命ずる良心を与えた。この良心の命令にあえて反した意思決定をした者は、「内面の法廷」において良心の審判を受け、良心の呵責という罰を受ける。たとえば人を殺そうと思ってピストルを撃ったところ、誤って狂犬に当り、人助けになったという場合のように、悪しき意思がたまたま良い結果を生み出したとしても、それは「内面の法廷」には何の効果もない。

Q　刑罰というものは、結局のところカントの主張に代表されているように、人間に与えられている自由意思が悪をあえて選び、それをよしとして悪の方向へ向かっていくことを決断したことへの非難ということになるわけですね。

I　ええ。したがって、長尾氏も言うように、ある行為の原因が判明すれば、すなわちその行為が自由意思に発する行為でないことが判明するなら、非難可能性はなくなることになるわけです。

Q　ところで、人間の行動への新たなビジョンを開いているのではないかと思われるクリシュナムルティの行

動観は、「意志の発動による行動観」とは異質のものとして、私には大変新鮮なものとして響いてくるものがあります。これ以後、この思いの下、お話を伺っていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、先程の話の流れに戻りたいのですが、その場その場における最善の行動は意志を誘引としないのであれば、その実態はどのようなものとなっているのか、この点についてはいかがですか？

I D教授は、最善の行動は、静かな精神からもたらされてくるものであり、それは全体的な精神により把握されたその場のトータルな状況において必要とされる行動に、即座にそして適切に出ることができる、という趣旨のことを述べています。この点について、D教授はいつものように具体例を出して、次のように鮮やかに印象づけます。

> われわれが、一匹のヘビに出くわした時、あるいはおぼれかけている人を見つけた時のように考えるひまがない時は、行動は直接的で、即座で、稲妻のように素速いものとなり、自発性から生まれた独特の喜びにあふれたものとなる。

Q そうしますと、平時ではなく、有事の際にとりわけ静かな精神は有効に働くと言えそうですね。

I まさしく。「言葉を糧とする精神が過去の記憶や、権威に内面的にも外面的にも左右されやすいのに対して、静かな精神または『ハート』は、今ここにある全体性から働くものであり、それは現実的で真実なるものと調和している」ということをD教授も述べています。

ここからは静かな精神と考える精神との有機的連関を探る視点に立って、しばらく話をしてみたいと思います。先ず初めに結論めいたことを言いますが、それは「静かな精神は考える働きを完全に自らに引き継ぐことも、それを改善していくこともできる」ということです。

Q われわれの精神は一つの全体として存しているものであるが、時々刻々生きていく中にあって考える精神が強く働いている場合、逆に静かな精神状態になっている場合、はたまた考える精神状態と静かな精神状態が

まるで点滅信号のように交互に現れるなど、その時々の精神状態の実相は千差万別であるわけですね。

ー　ええ。問題は、落ち着きのない状態からどっしりと安定した、それでいて鋭敏に事態に対処できる精神状態になるには、われわれの精神構造の中に、考えるせわしない状態から静穏な寡黙な状態に移行していくことができる働きがあることをしっかり確認しておくことが大切だということなのです。

そして、今われわれが現在進行形で取り組んでいるクリシュナムルティの教えに関するD教授の読解を通して、自分自身の精神を観察していく行為は、基本的には素手の状態で精神という複雑怪奇なモンスター的存在の実相に迫ろうとする試みであって、これまで人類が蓄積してきた宗教的知識、教説などはすべて横に置いておくことが大切です。自らの精神の動き、身体の状態に鋭敏に気づいていること、これに尽きると言ってもいいわけですね。